

平成25年 日本建築士会連合会賞

審査総評 作品審査委員長 村松映一

第41回会員作品展は全国29建築士会より96点の応募があった。4月15日の書類審査により現地審査対象作品17点を選び、1点2名以上の審査員構成によって随時現地審査を行った。7月22日、審査員全員出席のもと、現地審査を行った審査員の講評を踏まえた真摯な検討を経て、審査員全員の合意により優秀賞5点、奨励賞7点を選んだ。

応募作品点数が100点を下回ったことはグローバルな視点で捉えると、社会や経済状況の停滞による建築市場の縮小による影響が大きな要因になっているものと思われるが、一方、建築専門誌などのメディアで優れた作品が紹介されていることも事実である。さらに今年度は、アベノミクスによる建築市場の向上も幾分か期待される。本会会員の創意と努力に満ちた作品を募り、本会ホームページに掲載し、会員相互の技術を高めるためにも、多くの会員が奮って応募していただくことを審査委員一同願ってやまない。全国都道府県建築士会に所属する建築士の皆様に期待している。

応募作品の建物種別は、住宅（共同住宅を含む）が42点／応募数全体の43.8%（昨年度62点／54.8%）、施設（学校・研究所・医療等）が46点／47.9%（昨年度38点／33.7%）、事務所・店舗等が8点／8.3%（昨年度13点／11.5%）が示すように、住宅の応募数が大幅に減少している。

ちなみに、第41回応募作品で奨励賞に入賞した「ゆいま〜る那須」のように、自立する高齢者のための終の棲家を企画立案し、コンペで選ばれ事業としても成果をあげている作品がある。建築士は社会が求めるニーズに知恵と情熱を捧げることを惜しんではならない。

また、増改築、改修、耐震補強等により施設を魅力ある作品に蘇生させた事例も応募対象作品であることを忘れないでいただき

たい。過去にも幾多の作品が受賞の対象となっている。

優秀賞を受賞した5作品のうち「風の間」は、沖縄という地域特性を大阪在住の設計者が真摯に受け止め、太陽の光、風、水、植物など環境と豊かな関係性をもつ住まいとして、現地審査を行った審査員はもとより、全員から高い評価を受けた。

「北沢建築工場」は、地域工務店の加工場と事務所を長野県産材の杉材を使用して工務店の大工職人の手刻み加工で作りあげた作品である。構造設計を担当した稲山正弘氏の徹底した木材の品質管理のもと、木造大架構の木の香りの絶えない豊かな空間を生みだしている。

「オムロンヘルスケア研究開発及び本社新拠点」は、企画を担当したオムロンのマネージャーと設計者の情熱と想いが互いに切磋琢磨して作りあげた作品である。研究棟アトリウムほどよい空間スケールと階段の設けが巧みである。

残りの2作品は日建設計所属の大阪と東京の建築士による「龍谷大学 龍谷ミュージアム」と「ホキ美術館」である。前者は素材やディテールにこだわり徹底した職人芸を求めてやまない作品であるのに対し、後者は構造を核とした高度な技術が求められる作品である。特にオーナーの蒐集した300点の写実絵画を500mに渡って展示したギャラリーは見ごたえがある。

残念ながら優秀賞を逃した「Snow Peak Headquarters」は、起伏のある大地と水平線を強調した施設とが生み出したランドスケープが、大変印象に残ったことを付け加えたい。

最後に、環境の時代にこそ、原理、原則をしっかりと身につけることの大切さを肝に銘じたいと思う。